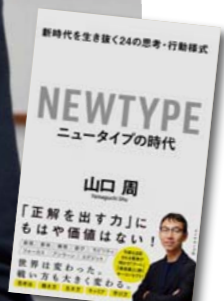


役に立たない読書が武器になる

山口周



1970年、東京生まれ。独立研究者・著作家・パブリックスピーカー。電通、BCGなどで戦略策定、文化政策立案、組織開発等に従事した後、独立。「世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?」(光文社新書)、『武器になる哲学』(KADOKAWA)など著書多数。

「ニュータイプの時代 新時代を生き抜く24の思考・行動様式」(ダイヤモンド社)。大きく切り替わった時代をしなやかに生き抜くための知恵が満載の最新刊が大好評。

第一線で活躍している経営者やリーダーは、どんな本を読んでいるのか。どんな基準で本を選び、読書体験から何を学んできたのか。第3回目は、『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』や『ニュータイプの時代』などのベストセラーで今、「旬」の人として注目を集める山口周さんにお話を伺いました。

若い頃、役に立たない本を乱読

誰もが日々感じているような時代の本質を鮮やかに切り取って共感を呼ぶ山口さんの言葉。それは読書を通して膨大な知識量に裏打ちされたセンスに違いない。分野を超えた知のエバンジェリストに改めて読書について訊ねると意外な答えが返ってきた。

「僕の周りにはかなりの読書家たちがいるのですが、彼ら彼女らと比べると、自分はいわゆる文学、文芸書の割合が圧倒的に少ないですね。本が大好きな人たちって、やっぱり小説をはじめ文学なんです。昨年、ノルウェー・ブッククラブが『世界最高の文学100冊』を発表しましたが、『全部読んで』と平気で言うんです。僕の場合、3分の2は読んでいないかなって感じですね」

謙遜してのコメントであろうが、ご自身によれば、実際に読んできたのは文学より自然科学、社会科学の本が多いのだという。

「最初はやっぱり児童文学やSFだったんですけど、中学に入る頃にはもう乱読という感じで、

人と組織が問われる今、まさに時代が山口さんに追いついてきたと言えるだろう。

「ニュータイプ」が美意識を鍛えた後

そんな山口さんが近年、読んで面白かったイチ押しは――。

「森本あんり先生の『反知性主義』(新潮選書)です。反知性主義という言葉は誤解されますが、本来は知性が権力と結託して教義やルールで人間を疎外・蹂躪することへの反抗なんです。なぜアメリカだけにイノベーションが起こるのか。いろいろな解釈がありますが、非常に素朴な善性に根ざしているところにあの国の強さがあるのだと。アメリカに対する理解が深まりました。」

最近ではW・アイザックソンの『イノベーターズ』(講談社)、それから大澤真幸先生の『社会学史』(講談社現代新書)。今はとにかく気になる本は全部買ってみて実際、目を通してどうかって感じですね」

日立のWebマガジン「Executive Foresight Online」でもリベラルアーツをテーマに多彩な有識者との対談シリーズを展開している山口さん。読書人としての知的好奇心は相変わらず旺盛のようだ。



山口さんのイチ押し本、森本あんり著『反知性主義』(新潮選書)。他にW・アイザックソンの『イノベーターズ』(講談社)もおススメ。

これはと思う本を手あたり次第に読んでいましたね。そんな中、出会った一冊が心理学者の宮城音弥先生の『天才』(岩波新書)。歴史上の天才が残した文献から、どんな精神的な疾患を持っていたかを調べ上げた、今言う病跡学ですが、中学時代に繰り返し読んで心理学に興味を持ちました」

やがてポストモダンが脚光を浴びるが、そうした流行には無関心で、ひたすら自分が面白いと思う本だけを読み漁る「超然」たる少年だったとのこと。「僕はずっと航空機の本が大好きなんです。最適制御の研究者で東大航空学科の加藤寛一郎先生が、太平洋戦争のエース操縦士の坂井三郎にインタビューしていて、これがとても面白いんですよ。航空機的设计思想に関する加藤先生の本は高校・大学時代はかなり読み込みました。または太平洋考古学という学問があって、ハワイのホノルルにあるビショップ・ミュージアムの篠遠喜彦先生という日本人の人類学者の本も夢中で読んでいましたね。それこそ何の役に立たない本ばかりなんですけど(笑)」

「コンサル時代の武器」としての読書

社会人になると、それまで手に取ることのなかったビジネス書が読書対象として加わる。

「最初に読んだのはジェームズ・W・ヤングの『アイデアのつくり方』(CCCメディアハウス)。広告代理店では新入社員の必読書となっている古典です。それからマーケティング

関連や当時本格的に浸透してきたインターネットに関するものなど、社会科学の延長線上で興奮しながら読んだ覚えがあります」

その後、戦略コンサルタントへ転身。ビジネスの第一線でキャリアを重ねる中で大きな転機を迎える。そこで社会人になっても変わらず続けてきた読書から示唆を得たという。

「人って案外、自分は本当に何がやりたいのか、分かっているものなんです。これは僕自身の体験ですけど、コンサル業界でそれなりに経験した後、自分の専門領域を決めるにあたって、欧米の動き、技術トレンド、世の中へのインパクトなどを勉強しようと専門書を手にするんですけど、どの本を読んでも眠くて眠くて(笑)。読み終わっても自分の中に残るものがほとんどないという状態が続いたんです。一方、歴史や心理学などの本も読んでいて、こちらは面白くて夢中になれる。そこで気づいたんですね、頭で考えるのと、心で感じるのとは違うんだなと」

そんな折、とある縁から人や組織に関する人材戦略に携わることになった。当時読んで印象に残っている本は、野田智義・金井善宏共著『リーダーシップの旅』(光文社新書)、野中郁次郎著『知識創造の経営』(日本経済新聞社)など。

「元々どうすれば儲けられるかよりも、世の中や組織の構造を知ることに興味があったんですけど、今まで個人的な興味で読んできた本も『人』という一点からすべてに紐づけ、生かせることが分かったんです」